

待ちます

潘 紅艷
中国・二〇・大学生

勇君

霞んでいる月 きらきら光っている星 おぼろなネオンサイン 風に揺れている柳の枝

勇君はまだ覚えていますか。このような夜空、このような夜景、童話のような思い出。あの夜もこんなやのようなきれいな夜でした。一人の男の子と一人の女の子が揺れている柳の下で満天の星を眺めていました。

「もし私たちが星だったら、どの星になりたいの？ あの星かな？ 一番明るいほうの」と女の子は一番明るい星を指して言いました。

「いや、僕なら、あっちの星になりたいなあ」と男の子はあまり明るくない星を指しました。

「なぜ？」女の子は聞きました。

「あの星は確かに明るいけど、一人で寂しいようだね。でもあっちの星、あまり明るく

ないけど幸せそうだよ、そばにはもう一つの星があるから。あれが僕だとすれば、きっとそばにいるのは君だよ」男の子は女の子の無邪気で可愛い顔を見て言いました。女の子はジンとなって、目の中に何か光っているものがありました。すると冴えた月光の中で二人はしっかりと抱きしめ、幸せな気分一杯でした。そして二人がいつまでも愛し合っている、いつまでも別れないことを心に誓いました。霞んだ月が見えました。目をパチパチさせた星も見えました。

勇君はまだ覚えていますか？ きれいな夜空、幸せな思い出、もう忘れたかもしれないね。夜空は変わっていないけど、勇君といっしょにそれを眺めている人はもう私じゃないでしょう。

でも勇君は知っていますか？ 私にとってあの日の夜空ほどきれいな夜空はもうない。勇君に会ってから、もうほかの誰も好きになれない。もう勇君しか愛せない。やっぱり勇君を待ちます。たとえ一生待ち続けても、ずっと勇君を待っています。